



平成30年度第2回EAJ北海道・東北支部・講演会

理事・北海道東北支部理事 安斎 浩一 / KOICHI ANZAI

北海道・東北支部主催の平成30年度第2回講演会が、平成30年9月21日(金)15時30分より北海道大学工学部(札幌市)アカデミックラウンジ3を会場に開催された。参加者は、約20名。増田隆夫支部理事(北海道大学・工学研究院長)の司会で、宮城光信支部長及び名和豊春支部理事(北海道大学総長)による挨拶があった。引き続き、次の2件の講演があった。まず、大

野宗一准教授(北海道大学・工学研究院)による「スパコンで加速する新素材開発－ミクロ組織の予測と制御－」と題した講演。金属が凝固する際の特徴によって、得られる金属のミクロ組織は変化しバルクとしての機械的特性も変化する。どのような凝固組織が得られるかを直接観察するのはきわめて困難であり、数値シミュレーションによる予測技術が有効である。北大で提案されたフェーズフィールド

(Phase Field : PF) 法と呼ばれる計算手法を発展させ、SIP(革新的構造材料:マテリアルズインテグレーション)にて、高精度で大規模な計算が実行可能な状況となってきた。また、原子レベルでのシミュレーション技術である分子動力学法(MD)がカバーするスケールとPFがカバーするスケールを重ねる(クロススケールと呼ぶ)解析が可能となっておりMDによる10億分子によるシミュレーションも可能になってきた。次は、野口伸教授(北海道大学・農学研究院)による「SIP「次

世代農林水産業創造技術」の取り組み－アグリイノベーション創出－と題した講演。準天頂衛星システム(QZSS:みちびき)による日本版高精度GPS技術を活用することで、自動走行する農機による農作業(ロボット農業)の実現を目指している。また、農業におけるSociety5.0の実現をめざし、水管理(給水・排水)の自動化やスマート農機群による適正施肥技術、農業データ連携基盤の構築にも取り組んでいる。また岩見沢市において、自動走行に必要な3Dマップ作成を含めたマルチロボットシステムによる大規模農場実証試験も進めており、2020年までに遠隔監視での自動走行実現を目指している。講演後、札幌駅近くの会場に移動し、講師を囲んで和やかに懇談した。



増田隆夫支部理事



宮城光信支部長



Audience



野口伸教授



大野宗一准教授



名和豊春支部理事

九州支部 工業高等専門学校出張講演会 「工学が果たす多様な社会貢献」

理事・九州支部副支部長 日野 伸一 / SHINICHI HINO

◇日時：2018年11月28日(水)13:00～14:40

◇会場：(独)国立高等専門学校機構 大分工業高等専門学校

◇講師：塚原健一氏(九州大学大学院工学研究院附属アジア防災研究センター教授)

高松 洋氏(九州大学副学長・大学院工学研究院教授)

上記講演会は、次代を担う優秀な若きエンジニアの育成をめざして、毎年、スーパーグローバルハイスクールに採択された九州沖縄地区の高校や工業高等専門学校の学生を対象として、九州支部が主催するものである。今年度は、昨年度の佐世保工業高等専門学校に続き、大分工業高等専門学校において行われた。当日の参加者は、本科4年生を中心として約200名の学生および教職員であった。

先ず、大分高専の校長の日野伸一理事・副支部長の開会挨拶の後、大江田憲治常務理事が主催者を代表して挨拶に立ち、日本工学アカデミーの紹介と学生への激励の言葉を述べられた。続いて、本会の正会員である2名の講師による講演が行われた。本年度のテーマは、標題に示すとおり、私たちが営む日々の暮らしの中でインフラ、医療、食品などの製品、技術、システムなどのあらゆる分野において工学の果たす



日野伸一 理事・副支部長



大江田憲治 常務理事



塚原健一 九大教授



高松洋 九大教授



会場風景



ロボコン部視察

役割がますます増大していくことを念頭に、「工学が果たす多様な社会貢献」とした。

塚原健一氏が、「土地利用と行財政から見た災害対策」と題して講演された。塚原氏は、都市計画がご専門で、九大教授着任前に、長く国土交通省の技術官僚として国内および海外の開発途上国での防災やまちづくりに携わってこられた経験と、先の東日本大震災や熊本地震の復興対策を踏まえて、わが国の災害対策行政の変遷、復興のための行財政施策、災害に強いまちづくりなどについてわかりやすく紹介された。

次に、高松洋氏が、「機械工学の枠を越えて～ネツヤ(熱工学研究者)が行う細胞凍結の研究～」と題して講演された。高松氏は、機械工学の中で熱工学がご専門で、生体工学(バイオエンジニアリング)まで幅広い領域をカバーする融合研究を多岐に亘り実施されている。熱工学が専門のご自身がなぜ細胞凍結などの生体工学を研究し始めたのか、細胞や人体の臓器などの凍結、再生医療への応用など、いずれも熱物質移動の観点から共通するものがあることを含め、わかりやすく解説して戴いた。

両氏ともに、聴講者の大半が高専4年生ということ十分に意識され、わかりやすく、かつ学生たちの工学へのモチベーションが向上するような話しぶりに、講演終了後も活発な質問が相次いだ。講演会終了後は、キャンパスの施設見学が行われた。当校の主要な研究施設や学生たちの部活動として代表的なロボコン、足踏みミシンボランティアなどの活動状況を視察し、活発な議論が展開された。わが国の次代の工学分野を先導する高専の学生たちにとって有意義な出張講演会となった。



IKCEST国際シンポジウム報告及びAlibabaグループ本社訪問

理事・東京医科歯科大学教授 中島 義和 / YOSHIKAZU NAKAJIMA

2018年10月26日(金)に中国杭州で開催されたIKCEST international symposium 2018に参加したので報告する。本会議は、ユネスコのもと、中国工学アカデミー(CAE)ならびに英国 Royal academy of engineering (RAEng)が中心となって杭州に設立したInternational Knowledge Centre for Engineering Sciences and Technology under the Auspices of UNESCO (IKCEST)の主催で2015年よりCAEの運営で毎年行われ、今回は杭州で開催された。Opening ceremonyでは、Xiaohong Li CAE会長、Wenxu Wang 浙江省副省長、Philippe Pypaert UNESCO北京支局プログラム長のご挨拶のほか、日本から参加した小泉英明上級副会長のご紹介等が行われた。ユネスコからは6名が参加した。今回のテーマは“Next generation artificial intelligence & knowledge service”であり、人工知能に関する研究ならびに産業につ



いて、日中韓工学アカデミーのメンバー7名が発表を行った。内容は、金融経済、生産ロボティクス、スマートシティ、ショッピング、医療、AIデバイス、Big data 解析など多岐に亘った。企業からの発表も含まれ、中国からはBaiduならびにMaimai、韓国からはKakaoが発表した。また、発表者3名ならびに4名による40分間のパネル討論が2回用意され、発表内容ならびに人工知能の将来について議論がなされた。日本からは、中島が“Automatically combining and processing of Knowledge”と題して、AI コンピュータの自律通信とそれによる情報処理ならびに

情報統合について技術の紹介と成果を発表し、パネル討論ならびに閉会後の懇談において、質問と相互の研究紹介をとおして多くの交流をもった。今回のIKCESTへの参加は、AI に対する社会からの期待の大きさを感ずるとともに、ICT産業が社会に与える影響を高めつつあること、ならびにその市場規模が拡大することを確信するものになった。

2018年10月27日に、日中韓工学アカデミーのメンバでAlibaba (アリババ) グループ本社を訪問した。アリババは中国のElectric-commerce (Eコマース) 企業であり、グループ本社は浙江省杭州にある。現時点の時価総額は4,200億ドル(約46兆円)で世界7位である。本社到着後、会社を紹介するブースに案内され、会社の歴史、変遷ならびに事業について説明を受けた。また、ブースでの説明後、会議室に案内され、Benjamin Zhong副社長ら経営陣と日中韓工学アカデミーメンバが交流ならびに討論する機会が与えられた。

アリババは1999年に設立され、Eコマース、電子ファイナンス、クラウドコンピューティング、ならびにロジスティクスオペレーションを主軸として49部門、200以上のデータセンターを有する。Eコマースや電子決済を通して、中小企業を支援している。特に、QRコードを利用した決済Alipayは中国で広く普及しており、中国のキャッシュレス化(モバイルフォンによる決済)が進むインフラストラクチャを提供している。日本でのキャッシュレス化の遅れについても話が及び、それは貨幣への信頼が高いからではなく、別の要因があることが示唆された。小泉上級副会長から会社の柱とする目標について質問がなされ、中小企業をICTインフラストラクチャで支援して発展させ、社会全体を豊かにする戦略が示された。また、Google home や Amazon echo などのスマートスピーカー産業にも参入すべく開発を進めており、拡大する中所得者層の生活をより便利にしたいとのことであるが、基本は高等情報企業であり、ソフトウェアシステムを軸にした事業展開を行い、ハードウェア開発を自社で行う予定はないとのことであった。

そのほか、創業者のジャック・マー会長の熱意もあり、DAMO academyを創設して、教育にも力を入れるとのことである(DAMOは「仏陀」を意味する)。そこでは、ICT技術を学ぶだけでなく、興味と熱意をもって新しい産業を切り拓く人材が育成される。ICT産業を一過性のものと考えておらず、長期ビジョンをもって、また国家とも連携して戦略的に成長させていくとのことである。



日豪若手先端研究者による環学的新学術フォーラム 2018報告

上智大学理工学部機能創造理工学科准教授 坂本 織江 / *ORIE SAKAMOTO*

日豪若手先端研究者による環学的新学術フォーラム2018 (ERLEP Trans-disciplinary Forum 2018) が2018年12月3日、4日に豪州メルボルン市内のメルボルン大学パークヴィルキャンパスにおいて開催された。ERLEP (Australia Japan Emerging Research Leaders Exchange Program: 日豪若手研究者交流促進事業) は2009年度から2016年度まで交流派遣プログラムとして実施され、2017年度からフォーラムに移行したもので、今回のテーマは “Innovative Approaches to Address the UN Sustainable Development Goals” であった。

参加者は、ERLEP派遣プログラムの同窓生が日本側7名・豪州側6名であり、そのうちメルボルン大学教授の Jonathan Manton 氏、京都大学教授の黒田知宏氏、九州大学教授の伊藤一秀氏が共同で議長を務めた。また、EAJから小泉英明上級副会長、長井寿常務理事、東京大学教授の杉山正和氏に、ATSEか



ら Chief Executive Officer の Dr. Margaret Hartley と Senior International Relations Associate の Dr. Carolyn O'Brien に、招待参加として在メルボルン日本国総領事の松永一義氏に、オブザーバーとして八大学工学系連合会から北海道大学教授の五十嵐敏文氏と泉 典洋氏、国際企画事務室長の佐藤ひとみ氏に参加いただいたほか、聴講としてメルボルン大学の研究者数名の参加があった。

会議ではHartley氏、小泉氏、松永氏からの開会挨拶に続き、議長より2017年の福岡フォーラムのアウトカムを確認した後、両国のSDGs への取り組み、とくに健康（生命科学・医療・ヘルスケア）、エネルギー、教育分野における研究成果や活動について、9件のKeynote Speechと、それを踏まえた総合的な議論が行われた。最後に総括としてManton氏から、ERLEPを中心に今後は環学的なチームによる研究活動と、その成果の還元やQOL（Quality of Life）の向上のための教育プログラムの開発に取り組むとの提言があった。

会議翌日の12月5日にはIBM Researchの見学が行われた。また席上での会議に加え、ランチ、ディナー、ティータイムや、メルボルン大学のキャンパスの散策などを通して、参加者間でゆっくり話す時間も取ることができ、交流を深めることができた。

今回のフォーラムでは“Innovative Approach”として、研究活動のみならず、学生や一般の人など研究成果を必要とする人にいかに届けるかという活動の紹介もあった点が印象に残った。また、このような2国間での環学的かつ高い視点からの議論への参加は報告者にとって貴重な経験となり、同世代の研究者を含む活発な議論に、研究と教育に携わる身としても大変刺激を受けた。ERLEPの交流派遣プログラム並びにフォーラムを支援くださった関係各位に謝意を表したい。

次回のフォーラムは八大学工学系連合会とも連携し、2019年10月16日～18日に北海道大学において開催が予定されている。



2019年賀詞交歓会

日本工学アカデミー常務理事 大江田 憲治 / KENJI OEDA

1月17日（木）、ホテル東京ガーデンパレス2階「天空の間」において、日本工学アカデミー（EAJ）の新年賀詞交歓会が開かれた。阿部博之会長の挨拶に続き、尾身幸次元財務大臣の祝辞をいただき、賀詞交歓会が開会された。交歓会のはじめに際し、昨年6月に筑波で開催された日米先端工学（JAFOE）シンポジウムにおいて優れた講演を行った奈良先端科学技術大学院大学、松原崇充氏および東京大学地震研究所、平賀岳彦氏に対し、阿部会長からベストスピーカー賞の授与が行われた。引き続き、小宮山宏名誉会長の

乾杯のご発声のもと、懇親の宴がはじまり、しばらくの歓談のあと、この1年で新たに会員となられた正会員、客員会員、さらには、賛助会員企業の代表メンバーの紹介がなされた。この1年で、正会員59名増の789名となり、客員会員9名増の10名、賛助会員企業は5社増の48社となった。ここ数年、着実な伸びをしめしている。最後に永野専務理事から更なる発展を祈念するとの中締めの挨拶があり、お開きとなった。総勢約100名の参加があり、年の初めにふさわしい活気にみちた賀詞交換会となった。



日本工学アカデミー関西支部講演会 「医工情報連携における工学の役割」ご報告

EAJ 関西支部幹事 田中 敏宏 / TOSHIHIRO TANAKA

日本工学アカデミー関西支部は、平成30年5月に設立され、設立後初めてとなる記念すべき第1回講演会として、平成31年1月9日午後到大阪大学銀杏会館・阪急電鉄・三和銀行ホールにて、大阪大学における取組を中心に医工情報連携における工学の役割を考える機会となる講演会「医工情報連携における工学の役割」を開催しました。

EAJ関西支部・支部長 西尾章治郎大阪大学総長による開会の挨拶の後、ご来賓として、EAJ会長、阿部博之様ならびにEAJ副会長、科学技術振興機構顧問、中村道治様からご祝辞を頂戴しました。

講演会では、最初に、医学系の立場から、大阪大学大学院医学系研究科教授 澤芳樹先生より、「大阪大



澤 芳樹先生



坂田泰史先生



紀ノ岡正博先生



八木康史先生



講演会後の意見交換会

学医学部における医工情報連携」と題するご講演をいただきました。その後、大阪大学大学院医学系研究科教授で大阪大学国際医工情報センター長をお務めの坂田泰史先生から、「アカデミアにおける医工情報連携：大阪大学国際医工情報センターの取り組み」のご講演をいただきました。休憩を挟み、工学の立場から、大阪大学大学院工学研究科教授の紀ノ岡正博先生から、「再生医療への工学の寄与」のご講演、続いて、情報科学系の視点から、EAJ関西支部副支部長で大阪大学理事・副学長の八木康史先生から、「データリテリサイエンスと共創イノベーション」のご講演をいただきました。会場がほぼ満席となる250名のご参加をいただき、盛会裏に講演会を終えました。

途中の休憩時には、コーヒーコーナーにて、大阪大学の医工情報関係の部局等の紹介パネルの展示も行いました。また講演会の終了後は、银杏ラウンジにて、EAJ会員の皆様を中心に、意見交換会を開催し、賑やかにEAJ関西支部の記念すべき第1回目の行事を終了しました。



第2回ジェンダーシンポジウム 「女性参画で産業を変える、未来社会が変わる」

ジェンダー委員会委員長

国立研究開発法人科学技術振興機構副理事 渡辺 美代子 / MIYOKO WATANABE

2019年1月16日、EAJジェンダー委員会は、第2回ジェンダーシンポジウム「女性参画で産業を変える、未来社会が変わる」を京都大学時計台国際交流ホールで開催いたしました。京都大学エグゼクティブ・リーダーシップ・プログラム、京都大学男女共同参画推進センター、京都大学大学院工学系研究科に共催いただき、産学官から120名の方々が参加されました。今回は、イノベーション・起業・産業創造という視点から女性参画の重要性を語り、とりわけ工学に関わる科学者が、ベンチャー企業を起こし、新しい価値を次々と創出するためには、どのような社会的条件、制度設計やマインドセットの変革が必要か、といった課題について講演とパネルディスカッションでの熱心な議論が展開されました。

阿部博之会長の冒頭挨拶では、大学の国際評価が低迷している現況において科学者自ら行動することの重要性を述べ、自己保身から抜け出せない学者が多数いる中で、的確な意見表明をする女性科学者の存在の重要性に言及されました。続く関西支部幹事を務める北村隆行氏から、工学は多様性のある学問であり、課題に対して飛び越えるのが得意な学問であることから、今回の議論が社会全体に行き渡ることへの期待をご挨拶されました。

基調講演では、S&R財団CEO兼理事長の久能祐子氏に「跳ぶように考え、這うように証明する！」と題してお話いただきました。ご自身の経験に基づき、「目指すこと」は常に考えているうちに、直感的に見えてきたこと、ゴールがあってその登り方がビジョンで、リーダーはビジョンを示すことが大切であると力説なさいました。また、日本のイノベーションの今後の在り方について、まずは個人で飛ぶことが重要、その後組織、社会と協力関係を構築することにより、SDGsにも貢献できると指摘されました。その後、大阪大学大学院工学研究科教授で、創晶グループ3社取締役の森勇介氏に「心理学的アプローチによるイノベーション創出とベンチャー起業」と題してお話いただきました。心理学者のカウンセリングにより、自分を振り返ることでトラウマから抜け出すことができたことをご紹介いただき、メンタルを変えることで人間も、プロジェクトも活性化することを強調されました。

続いて本委員会副委員長の山口栄一氏がファシリテーターとなり、「三途の川の飛び越え方」というテーマでパネル討論を行いました。パネリストには、ご講演いただいた久能氏、森氏に加え、京都大学総長の山極壽一氏と本委員会委員の原山優子氏にも参加いただき、それぞれの実体験に裏打ちされたご発言をいただき、「内なるマインドセット」「女性の社会参画」「混迷する日本の産業・科学の未来」の3点について、



テンポ良く議論を展開しました。

工学を含めて日本がこれから良くなっていく要素がまだまだたくさんあること、より良い社会、より良い世界を創るには自分自身を知り、自分自身の中で創造性にとって障害となっているものを除外することが大切であることを改めて感じると同時に、今回の議論を次のステップに必ずつなげていく覚悟を持ったシンポジウムでした。



EAJ人材育成委員会2018年度シンポジウム報告

日本工学アカデミー人材育成委員会委員長

東京工業大学 環境・社会理工学院教授 橋本 正洋 / *MASAHIRO HASHIMOTO*

1. 人材育成委員会設立の考え方とこれまでの経緯

最近の内外のグローバルな環境変化を踏まえれば、人材育成は喫緊の課題であることは論を待たない。特に、工学系人材の育成に関しては様々な有識者から問題意識が投げかけられており、EAJ内部においても、関連の活動に対して常に最優先テーマと考えられている。このため、EAJにおいて、産学官の連携による、総合的な視野と中長期的な視点をもって戦略的に検討、提言を進めるプラットフォームとして、人材育成委員会を設置することとした。

同委員会では、これまでの人材育成制度の改革に関する政府、大学、学会、産業界等からの優れた提言も踏まえつつ、EAJ内外のキーパーソンの多様な声を聞き議論する研究会を適宜開催し意見交換を行ってきた。

2. 2018年度EAJ人材育成委員会シンポジウム

これまでの人材育成委員会の検討を踏まえ、2018年度の締めくくりとしてテーマ「日本のリーダー育成に向けた大学博士課程の役割」のシンポジウムを開催した。

シンポジウムでは、はじめに、林芳正参議院議員、前文部科学大臣にご登壇いただき、「超スマート社会(Society 5.0)時代の教育」と題して基調講演をいただいた。

続いて、政財官学の有識者にお越し、「日本のリーダー育成に向けた大学博士課程の役割とは？」をテーマにパネルディスカッションを行った。

登壇者はパネリストとして、大野敬太郎衆議院議員、尾道一哉味の素㈱常務執行役員イノベーション研究所長、鈴木教洋日立製作所執行役常務CTO兼研究開発グループ長、大嶋正裕京都大学工学研究科長、角南篤政策研究大学院大学副学長、坂田東一一般財団法人日本宇宙フォーラム理事長・元文部科学事務次官との豪華なメンバーにご参加いただき、モデレータは委員長の橋本正洋東京工業大学環境・社会理工学

院教授が務めた。

パネルディスカッションでは、冒頭、橋本より林前大臣の講演も踏まえ、論点を抽出し、議論の方向性を示した。論点1なぜPh.D.は日本のリーダーに少ないのか。日本固有の理由があるのか。論点2日本の理工系博士教育は、リーダーを育てるシステムになっていないのではないか。論点3日本の将来を支える人材に求められる資質は何か、これを育てる工学教育はどうあるべきか。

これらの論点について、政界、財界、官界からの視点からそれぞれリーダー育成に関する課題と博士教育の意義が述べられ、これを受けて学界パネリストより今後の大学教育の在り方についての課題について議論が行われた。

3. 今後の活動

本委員会は、EAJとしての議論のプラットフォームとして確立していくことを目指している。このため、年間数回の委員会を開催し、その都度の課題を抽出して議論を進めるとともに、年一回のシンポジウムにおいて毎年ごとに絞り込んだテーマにおいて今後も議論を進めることとしている。



林 芳正参議院議員



橋本 正洋教授



パネリスト

▶ 顕彰・叙勲

会員の藤野陽三氏が2019年学士院賞を受賞されました。心よりお祝い申し上げます。

新入正会員のご紹介

(2018・2019年入会者)

[第1分野]

おはら たく
小原 拓



東北大学流体科学研究所 教授

1963年生まれ。1986年東京大学工学部機械工学科卒業。1991年同大学院工学系研究科機械工学専攻修了、工学博士。東北大学助教、准教授を経て、2006年より現職。コーティング、液体の熱物性値を決定する分子動力学機構、固液界面の分子スケール熱・物質輸送、固体接合界面の熱抵抗低減などの研究に従事。日本機械学会フェロー。

こばやし ゆきのり
小林 幸徳



北海道大学大学院工学研究院 教授・工学院院长

1957年生まれ。1986年北海道大学大学院工学研究科博士後期課程修了(工学博士)。同年、北海道大学工学部講師、同助教授を経て2004年より同教授。2014年より同大学工学研究院副研究院長、2017年より現職。1992年オハイオ州立大学客員研究員、2005年シェフィールド大学客員教授。専門：機械工学、ロボット工学。

さくま いちろう
佐久間 一郎



東京大学大学院工学系研究科 教授

東大院・工・博士課程中退(1975)。工博(東大)(1989)
東大・工・精密機械工助手(1985)、東京電機大理工助手(1987)、講師(1991)、助教授(1992)、東大院・工助教授(1998)、創域助教授(1999)、同教授(2001)、工教授(2006)、東大院工学系研究科副研究科長(2015-17)日本生体医工学会理事長(2014-16)、PMDA副審査センター長(2013-18)専門分野：生体医工学・コンピュータ外科、レギュラトリーサイエンス 医工連携研究推進と社会実装に取り組む。

しづたに ようじ
渋谷 陽二



大阪大学大学院工学研究科副理事・教授

1958年生まれ。1983年大阪大学大学院工学研究科博士前期課程修了。同年(株)東芝入社。1988年大阪大学助手、1995年神戸大学助教授、1998年大阪大学助教授、1999年大阪大学教授で現在に至る。専門は固体力学、マイクロ塑性力学。

すずき そういちろう
鈴木 聡一郎



北見工業大学 学長

1884年北海道大学工学部卒業、1999年東北大学大学院情報科学研究科博士後期課程修了。博士(情報科学)。(株)アシックススポーツ工学研究所研究員、北見工業大学機械システム工学科助手、助教授、准教授、教授を経て2018年より現職。専門はロボット工学。

なかすか しんいち
中須賀 真一



東京大学大学院工学研究科 教授

宇宙、特に超小型衛星の研究開発を行い、2003年の世界初の1kg衛星を皮切りに9機の衛星の打ち上げ運用に成功しています。政府の宇宙政策委員も務め、日本の宇宙開発利用全体の舵取りも行っています。国家予算だけでなく、民間のリスクマネーなども利用して多角的で継続的な宇宙の利用・産業化・海外展開を目指しています。将来の世界に宇宙開発利用が貢献できる方策とそのための人材育成なども検討していきたいと思います。

なかた としひこ
中田 俊彦



東北大学大学院工学研究科技術社会システム専攻 教授

1960年神奈川県秦野市出身。1983年東北大学工学部機械工学科卒業、1985年同修士課程修了。同年(財)電力中央研究所入所。1993年東北大学博士(工学)取得、東北大学助教授。2006年東北大学教授。大学院工学研究科技術社会システム専攻にて、持続可能なエネルギー社会システムのデザイン、分析、マネジメントに取り組む。米国フルブライト研究員(1997-1998)、政府復興推進委員会委員(2013-)。

のなか よういち
野中 洋一



(株)日立製作所研究開発Gテクノロジーイノベーション統括本部 主管研究長

1991年 東北大学大学院工学研究科修了、ソニー株式会社を経て株式会社日立製作所生産技術研究所入社。2015年より現職。この間、2001年に米マサチューセッツ工科大学Laboratory for Manufacturing and Productivity客員研究員。2018年より京都大学大学院情報学研究科連携教授を兼務。

はしだ としゆき
橋田 俊之



東北大学大学院工学研究科附属先端材料強度科学研究センター 教授

1957年生まれ。愛媛県出身。1985年東北大学大学院工学研究科博士課程修了(工学博士)。東北大学で助手、助教授を経て1998年より現職。1991年から1992年米国ミシガン大学客員研究員。2003年より中国陝西科技大学客員教授。専門は機械工学で、複合材料等の不均質材料の高強度化・高韌性化や、燃料電池等のエネルギー材料の信頼性評価に関する材料強度学的研究に従事。

ほしの すむ
星野 進



(株)ニコン加工技術開発部 主幹研究員

1962年生まれ、1982年重慶大学工学部卒業、1987年重慶大学大学院工学研究科修了(工学博士)。重慶大学工学部講師、東北大学工学部助教、SpeedFam-IPEC主任技師、Lam Research主任技師を経て、(株)ニコン 主任研究員。砥粒加工学会フェロー。専門は、半導体プロセス(CMP、露光、スパッタリング、エッチング、洗浄)、光学デバイス、分光イメージング、超精密加工(固定砥粒研磨、遊離砥粒研磨)、歯車研削加工。

よしむら けんじ
吉村 健志



海上・港湾・航空技術研究所海上技術安全研究所 主任研究員

福岡県福岡市出身。1994年電気通信大学卒業、1998年立教大学大学院文学研究科修士課程修了(心理学)、2003年日本大学大学院生産工学研究科修士課程修了(工学)。産業技術総合研究所特別研究員を経て、2004年から現職。専門は、産業・組織心理学、人間工学。

[第2分野]

あかつ まさはる
赤津 雅晴



(株)日立製作所 技師長

1987年東京大学工学部計数工学科卒業。同年、(株)日立製作所入社。システム開発研究所情報サービス研究センター長、スマート情報システム統括本部戦略企画本部長、研究開発グループ技術戦略室長等を歴任した後、2018年より現職。2003年大阪大より博士(工学)取得。

いいだ いちろう
飯田 一郎



秋田県立大学システム科学技術学部情報工学科 教授

1955年京都市生まれ。1978年東京大学工学部電子工学科卒業。1983年同大学院工学系研究科博士課程修了(工学博士)。1983年富士通(株)入社。以後(株)富士通研究所で情報通信技術とソフトウェアの研究に従事。2012年より株式会社富士通研究所フェロー。2016年に富士通を退職し、同年より秋田県立大学教授。現在、IoTとSNSを融合した分散ソフトウェアアーキテクチャ構築と、農業・医療等の現場応用について研究を行っている。

かとう ねい
加藤 寧



東北大学大学院情報科学研究科 教授

1991年東北大学大学院工学研究科修了(工学博士)。同大助手、助教授を経て2013年より現職。2013年度同大総長特別補佐。現在、電気通信研究機構機構長、情報科学研究科研究科長補佐兼務。IEEEフェロー、電子情報通信学会フェロー。IEEE Communications Society副会長、IEEE Transactions on Vehicular Technology編集委員長。総務省情報通信審議会専門委員。無線通信、インターネット、IoT、パターン認識、AIなどの研究に従事。

かのう ゆたか
狩野 裕



大阪大学大学院基礎工学研究科長・基礎工学部長

1958年、大阪市に生まれる。1986年、工学博士(大阪大学)。筑波大学数学系、大阪大学人間科学部等を経て、現在、大阪大学基礎工学研究科教授、大阪大学数理・データ科学教育研究センター長。専門は、統計学データ科学、統計教育、応用数学。

かわせ まさあき
川瀬 正明



千歳科学技術大学 学長

1947年北海道生まれ。1970年北海道大学工学部電気工学科卒。1972年北海道大学工学研究科修士課程修了。同年日本電信電話公社(現NTT)入社。主にアクセス系光ファイバー伝送路の研究開発に従事。光通信線路研究部長、基礎研究所企画部長、技術協力センター所長等を歴任。1999年千歳科学技術大学教授。2006年大学院光科学研究科長、2008年総合光科学部学部長を経て2010年から現職。博士(工学)。

こやま ふみお
小山 三夫



東京工業大学科学技術創成研究院 教授

1957年東京生まれ。1985年東京工業大学大学院理工学研究科電子物理工学博士課程修了。東京工業大学精密工学研究所助手、助教授、教授を経て、2016年より現職。工学博士。専門は光エレクトロニクス、面発光レーザー、光インターコネクト。IEEE・応用物理学会・電子情報通信学会フェロー。

なかむら ひでお
中村 英夫



東京大学大学院新領域創成科学研究科 客員共同研究員

1968 年国鉄入社、(中央鉄道学園大学)。1973年鉄道技研。1986年東京理科大学工学部Ⅱ部電気工学科卒業。1987年(財)鉄道総研、1992年同室長。1994年より日本大学理工学部へ。1997年教授、2018年名誉教授。コンピュータ式鉄道信号装置の開発、ディペンダブルシステム、列車制御システムの研究に従事。日本信頼性学会会長、電気学会交通電気鉄道技術委員会委員長等を歴任。国土交通省技術検定委員。電子情報通信学会フェロー。工学博士。

みどりかわ かつみ
緑川 克美



国立研究開発法人理化学研究所光量子工学研究センター センター長

1983年慶應義塾大学大学院工学研究科博士課程修了。同年4月理化学研究所入所。1997年緑川レーザー物理工学研究室主任研究員、2018光量子工学研究センター長。超短パルス高出力レーザーの開発とその応用に関する研究に従事。OSA、IEEE、APS、応用物理学会およびレーザー学会のフェロー。文部科学大臣表彰(2006)、長江学者(2007)、泰山賞(2010)、報公賞(2011)等受賞。

や の かずお
矢野 和男



(株)日立製作所 フェロー

1984年早稲田大学物理学及び応用物理学修士卒。日立製作所入社。半導体回路デバイスの研究を経て、ビッグデータや人工知能の研究に従事。博士(工学)。IEEE Fellow。東工大大学院特定教授。文科省情報科学技術委員。

[第3分野]

いちき たかのり
一木 隆範



東京大学大学院工学系研究科マテリアル工学専攻 教授

1995年東京大学大学院工学系研究科修了。博士(工学)。同年より東洋大学工学部。助手、講師、助教授を務め、LSI製造プロセスとバイオデバイスの研究を重ねる。2004年より東京大学大学院工学系研究科。総合研究機構助教授、バイオエンジニアリング専攻准教授を経て、2016年よりマテリアル工学科教授、現職。2015年より、(公財)川崎市産業振興財団ナノ医療イノベーションセンター主幹研究員を兼務。専門は材料工学、ナノバイオテクノロジー。

かわい ともじ
川合 知二



大阪大学産業科学研究所 特任教授

1974年3月東京大学大学院理学系研究科博士課程修了、分子科学研究所を経て、大阪大学産業科学研究所助教授、教授、所長、総長補佐を歴任。日本学術会議連携会員。化学会、物理学会、応用物理学会会員。専門はナノサイエンス・ナノテクノロジー。

かわじり よしあき
川尻 喜章



名古屋大学大学院工学研究科物質プロセス工学専攻 教授

1975年岐阜県出身。2007年米国カーネギーメロン大学 Ph.D.独国マックスプランク研究所(マクデブルク市)ポスドクの後、2008年米国ジョージア工科大学化学生体分子工学科にてAssistant Professor。2015年同校Associate Professor、終身在職権(テニユア)取得。2017年より現職。専門は化学工学、プロセスシステム工学、吸着プロセスなど。

さとう ひろゆき
佐藤 裕之



弘前大学大学院理工学研究科 研究科長・教授

1961年生まれ、岩手県盛岡市出身。1984年東北大学工学部金属材料工学科卒業、1990年同大学博士後期課程材料物性学専攻修了、工学博士。同大学工学部助手、講師を経て1999年弘前大学理工学部助教授、2013年同大学理工学研究科教授、副研究科長、同大学教育推進機構アドミッションセンター長（併任）を経て2018年から同大学理工学研究科長・理工学部長。専門は金属材料。合金の高温変形、長時間強度の評価と予測に関する研究などに従事。

ぬまた けいじ
沼田 圭司



国立研究開発法人理化学研究所 チームリーダー

2003年東京工業大学工学部卒業、2007年同大学院総合理工学研究科修了。博士(工学)。日本学術振興会（JSPS）海外特別研究員、理化学研究所上級研究員を経て、2012年より同チームリーダー。その間、マレーシア科学大学客員教授、Spiber株式会社Visiting Fellow、革新的研究開発推進プログラム（ImPACT）プロジェクトリーダー、JST-ERATO研究総括などを兼務。専門は高分子科学。

のむら まさかつ
野村 正勝



大阪大学 名誉教授

1940年生まれ。大阪市出身。1964年大阪大学工学部応用化学科卒業、1969年同大学院工学研究科修了。博士(工学)。石炭化学・石炭工業（勿論今はない）という講座の助手、講師、助教授を経て1984年教授。無機溶融塩を触媒媒体とする複雑な炭化水素の転化反応研究を経て、出発物質の有機資源の分子構造に魅了され、その精密分析の過程で多環芳香族化合物類の多様な特性に遭遇、今も深く惹かれている。

ふじわら かずひこ
藤原 一彦



住友ベークライト(株) 代表取締役社長

1958年、京都府生まれ。1980年名古屋工業大学・合成化学科卒業。1980年住友ベークライト株式会社に入社。入社後は熱可塑性成形材料の研究から始まり、米国技術駐在員を経て、新規事業であるバイオプロジェクトの立ち上げ、その後はフィルムシート・ヘルスケア・高機能プラスチック製品事業を担当し、2018年代表取締役社長に就任。経済・産業界関係団体においては、合成樹脂工業協会常任理事・日本医療機器テクノロジー協会理事を歴任。

みやはら ゆうじ
宮原 祐二



東京医科歯科大学学生体材料工学研究所 所長・教授

1956年生まれ。1980年東京工業大学工学部卒業。1985年同大学院理工学研究科修了。工学博士。日立製作所中央研究所入社。1988年スイス連邦工科大学客員研究員、2002年物質・材料研究機構グループディレクター、2008年同生体材料センターセンター長、2010年東京医科歯科大学学生体材料工学研究所教授、2014年同所長、現在に至る。半導体技術とバイオテクノロジーの融合領域の研究に従事。

[第4分野]

いとう かずひで
伊藤 一秀



九州大学総合理工学研究院 教授

1995年名古屋大学工学部建築学科卒業、2000年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了。博士（工学）。東京工芸大学工学部建築学科助手、講師、助教授、九州大学総合理工学研究院准教授を経て、2016年より同教授。その間、豪州RMIT大学Visiting Professorを兼任。専門：建築環境工学、公衆衛生工学

いわた しん
岩田 眞



東海旅客鉄道(株)常務 執行役員

1980年東京大学工学部土木工学科卒業、日本国有鉄道入社。1996年東海旅客鉄道(株)建設工事事務土木工事課担当課長。2010年建設工事事務東京建設部長（現：中央新幹線建設部長）。2014年同社執行役員を経て、2018年より現職。

うえだ たもん
上田 多門



北海道大学大学院工学研究院 教授

1954年東京生まれ。1977年東京大学工学部卒業。1982年工学博士取得（東京大学）。1982年ワシントン大学助手、1984年東京大学講師、1986年東京大学助教授、1987年アジア工科大学助教授、1989年同副教授、1991年北海道大学助教授、2004年より現職。2011年大連理工大学海天学者。2012年浙江大学包玉剛首席教授。深圳大学特聘教授。アジアコンクリート連盟元会長。土木学会副会長。国際構造コンクリート連盟からMedal of Merit受賞。

きし のりみつ
岸 徳光



室蘭工業大学 特任教授

1949年秋田県生まれ。1977年北海道大学大学院工学研究科博士課程修了。同年電力中央研究所入所。1982年に助教授として室蘭工業大学に移り、1998年より教授。2007年から2年間同大学理事。2012年より釧路工業高等専門学校校長。2018年より現職。専門は土木工学分野、特に構造物の耐衝撃問題、新素材繊維を用いたコンクリート構造物の補修・補強問題。

くさ はんびん
葛 漢彬



名城大学理工学部社会基盤デザイン工学科 教授

1965年生まれ。1994年名古屋大学工学研究科博士後期課程修了後、名古屋大学助手、1998年同大学准教授を経て、2008年名城大学教授。2013年土木学会フェロー。専門は構造工学、耐震工学、鋼構造学。

こいずみ ひでき
小泉 秀樹



東京大学先端科学技術 研究センター 教授

東京大学まちづくり研究室教授。研究成果をふまえて多くの市民団体、自治体とまちづくり・コミュニティ・デザインの実践に取り組んでいる。都市計画提案制度など、まちづくり関連の制度創設に関わる。著書に「コミュニティ・デザイン学」(編著、東京大学出版会)、「コミュニティ辞典(共編著、春風社)」ほか。東日本大震災からの復興支援でグッドデザイン賞などを受賞。現在の関心は少子高齢社会における持続可能なまちづくり。

しぶや さとる
澁谷 啓



神戸大学大学院工学研究科 教授

1956 年生まれ。1981年神戸大学大学院工学研究科修士課程修了。1985年英国ロンドン大学インペリアルカレッジ博士課程修了(1986 年 Ph.D.)。2001年博士(工学)東京大学。ロンドン大学助手、東京大学生産技術研究所助手、北海道大学大学院工学研究科助教授を経て、2004年により現職。専門は地盤工学、地盤材料学、減災工学など。

そのだ よしみ
園田 佳臣



九州大学工学研究科 教授

1985年九州大学工学部卒業、1987年同大学院工学研究院修了、1994年博士(工学)。戸田建設株式会社、防衛大学校助手、同講師、九州大学助教授を経て2005年より同教授。2018年より同大学総長補佐。専門は構造工学(土木)。

まなぎ しゅんすけ
馬奈木 俊介



九州大学大学院工学研究院 都市研究センター長・教授

1999年九州大学大学院工学研究科修士課程修了。米国ロードアイランド大学大学院博士課程修了。サウスカロライナ大学、東北大学等を経て、2015年より九州大学大学院工学研究院都市システム工学講座教授、都市研究センター長。都市工学。環境資源システム分析を用いた豊かさの計測(新国富)の分析に従事。

まるやま いっぺい
丸山 一平



名古屋大学大学院環境学研究科都市環境学専攻 教授

2003年東京大学大学院工学系研究科修了(博士(工学))。同年、広島大学大学院工学研究科・助手、2005年より名古屋大学大学院環境学研究科・助教授、同准教授を経て2016年より同教授。研究分野は、セメント化学、コンクリート工学、応用地質学、建築保全学など。

みむら のぶお
三村 信男



茨城大学 学長

1949年広島県生まれ。1979年東京大学工学系研究科博士課程修了(工学博士)。東京大学助手、助教授、茨城大学助教授などを経て1995年より同教授。2014年より茨城大学学長。専門は地球環境工学、海岸工学。「気候変動に関する政府間パネル(IPCC)」の総括執筆者等を務めた。

よしの ひろし
吉野 博



東北大学 名誉教授

昭和46年東京大学大学院工学研究科に進学、平成49年東京大学生産技術研究所助手、昭和53年東北大学工学部建築学科助教授、平成4年教授、平成20年東北大学ディステインディングイッシュト・プロフェッサー、平成24年退職。日本建築学会会長、日本学術会議会員、アジア学術会議事務局長などを歴任。現在、秋田県立大学客員教授、前橋工科大学客員教授、同済大学 顧問教授、重慶大学特聘教授、浙江大學外国人特別講師、浙江清華長三角研究院教授。

[第5分野]

すぎやま まさかず
杉山 正和



東京大学先端科学技術研究センター 教授

1972年静岡県生まれ。1995年東京大学工学部化学システム工学科卒。2000年同専攻博士課程修了。博士（工学）。2002年同学工学系研究科電子工学専攻講師。助教授を経て、2017年同学先端科学技術研究センター教授。高効率太陽電池をベースにした再生可能エネルギーシステム構築に従事。

なかむら ひさし
中村 尚



東京大学先端科学技術研究センター 教授

1960年神奈川県出身。1990年ワシントン大学大気科学科博士課程修了（Ph.D.）。ワシントン大・プリンストン大研究員、東京大学大学院理学系研究科助手、准教授、教授を経て、2011年より現職（2016年より副所長）。現在、日本学術会議第三部会員、海洋研究開発機構招聘上席研究員、気象庁異常気象分析検討会会長。専門は異常気象・気候変動、大気海洋海水相互作用。

[第6分野]

なかむら やすのぶ
中村 泰信



東京大学先端科学技術研究センター 教授

1968年大阪府生まれ。1992年東京大学大学院工学系研究科超伝導工学専攻修士課程修了。同年日本電気株式会社入社。2005年同社基礎・環境研究所主席研究員。2011年東京大学大学院工学系研究科物理工学専攻より博士（工学）取得。2012年より現職。2014年より理化学研究所創発物性科学研究センターチームリーダー兼任。専門は物理学・量子情報科学。

にしなり かつひろ
西成 活裕



東京大学先端科学技術研究センター 教授

1967年東京都生まれ。東京大学大学院工学系研究科博士課程修了、博士（工学）。山形大、龍谷大を経て現職。専門は数理物理学で、様々な渋滞を分野横断的に研究する「渋滞学」を提唱し、著書「渋滞学」（新潮選書）は講談社科学出版賞などを受賞。2007年JSTさきがけ研究員、2010年総長補佐、および内閣府イノベーション国際共同研究座長。科学技術への顕著な貢献 2013（ナイスステップな研究者）」に選出される。

[第7分野]

おかの ひでゆき
岡野 栄之



慶應義塾大学医学部 教授

私は、医学部卒業の医学博士ですが、基礎医学領域で、ニューロサイエンスと再生医療を専門としており、脳の構造・機能計測やゲノム情報のインフォーマティクスという点で、工学系研究者と密な共同研究を行なっております。これまで解明が進んでいなかった脳機能について、新しい技術を開発・取り入れることにより、その解明を目指し、治療法になかった精神・神経疾患の治療法の開発を目指したいと考えております。

かんざき りょうへい
神崎 亮平



東京大学先端科学技術研究センター 所長・教授

1986年筑波大学大学院博士課程生物科学研究科修了。理学博士。ミラノ・ビッコカ大学名誉学位(2019)。2003年筑波大学生物科学系教授。2004年東京大学大学院情報理工学系研究科教授。2006年同大学先端科学技術研究センター(先端研)教授。2016年より所長。生物(昆虫)が進化により獲得した環境適応能(生物知能)を神経科学・コンピュータサイエンス・ロボティクスなどの学際的アプローチにより再現し、理解して活用する研究を展開。

たかはし まさよ
高橋 政代



理化学研究所生命機能科学研究センター プロジェクトリーダー

1986年、京都大学医学部卒業。1992年、京都大学大学院医学研究科博士課程(視覚病態学)修了。京都大学医学部助手を経て1995年ソーク研究所研究員。2001年、京都大学医学部附属病院探索医療センター開発部助教授。2006年、理化学研究所発生・再生科学総合研究センター 網膜再生医療研究チーム チームリーダー。2018年4月より現職。

つもと こうへい
津本 浩平



東京大学大学院工学系研究科バイオエンジニアリング専攻 教授

1991年東京大学工学部工業化学科卒業、1995年同大学院工学系研究科博士課程中途学。博士(工学)(東京大学)。同年東北大学助手。同講師、助教授、2005年東京大学大学院新領域創成科学研究科助教授を経て、2010年より同医科学研究所教授。2013年より同大学院工学系研究科教授。同医療福祉工学開発評価研究センター長、医薬基盤・健康・栄養研究所招聘プロジェクトリーダー兼務。専門は分子医工学、蛋白質工学、生命物理化学。

やすい まさと
安井 正人



慶應義塾大学医学部 教授・医学部長補佐

専門は小児科学、薬理学。水分子の生物学・医学という新しい領域を提唱し、生命現象における水分子の役割の解明を目指している。計算機科学、生物物理学、分子生物学、医学等幅広い観点から「水」をキーワードとした研究に取り組んできた。具体的には、生体の水動態を制御する水チャネル、アクアポリンの研究のみならず、水分子の可視化技術の開発、生体水分子動態の解析などを進め、医学への応用を目指している。

[第8分野]

こんどう れいこ
近藤 玲子



総務省サイバーセキュリティ統括官室 参事官

1991年東京大学理学部情報科学科卒業、1993年同大学院理学系研究科情報科学専攻修了。米国スタンフォード大学大学院経営学修士(MBA)。博士(学術)。1993年旧郵政省入省。国立研究開発法人情報通信研究機構(NICT)サイバーセキュリティ研究所企画室長、内閣官房情報セキュリティセンター企画調整官、放送技術課技術企画官、総合通信基盤局電波部重要無線室長、電波環境課長等を経て、2018年7月より現職。

さとう ていいち
佐藤 禎一



桜美林大学特別招聘 教授

1964年京都大学法学部卒業。2009年博士（政策研究大学院大学）。2000年文部事務次官退官。同年日本学術振興会理事長。2003年ユネスコ代表部特命全権大使。2006年東京国立博物館長。2009年国際医療福祉大学大学院教授（現在名誉教授）。2018年より現職。

はせがわ ふみひこ
長谷川 史彦



東北大学未来科学技術共同研究 センター長・教授・総長特別補佐

1957年生まれ。1979年東北大学工学部卒業、1981年同大学大学院工学研究科博士前期課程修了。博士（工学）。東北大学選鉱製錬研究所助手、新日本製鐵(株)第一技術研究所主任研究員、NEDO国際共同研究課主査、新日本製鐵(株)技術開発企画部部長代理を経て、2000年東北大学へ移り、2005年同大教授、2017年より現職。専門：界面化学、材料工学。

まきはら いずる
牧原 出



東京大学先端科学技術研究センター 教授

1967年生まれ。1990年東京大学法学部卒業。2006年東北大学大学院法学研究科教授。2013年東京大学先端科学技術研究センター教授。政治学・行政学上の諸課題を歴史研究をもとに考察・分析する研究を主として、史料の分析やオーラルヒストリーにより、新事実の発掘と政治構造の解明を目指しています。また地域の政策課題を解決するため、分野横断的な実践的研究も進めています。

新入客員会員のご紹介

(2018年8月入会者)

チン キュアン
陳 強



東北大学大学院工学研究科 教授

昭63年西安電子科技大学卒。平成3年東北大大学院博士前期課程、平成6年に同大学大学院後期課程了。工学博士。アンテナ、マイクロ波・ミリ波、電磁界の測定法及び数値解析法の研究等に従事。平成20年電子情報通信学会(IEICE)第2回喜安善市賞。IEICE応用電磁界計測時限研究専門委員会委員長、無線電力伝送研究専門委員長、IEEE AP-S Tokyo Chapter Chairを歴任。

キム ユウス
金 有洙



国立研究開発法人理化学研究所 主任研究員

1991年韓国ソウル大学化学科卒業、1999年東京大学大学院工学研究科修了。博士（工学）。同年理化学研究所入所。以降基礎科学特別研究員、専任研究員などを経て、Kim表面界面科学研究室を主宰。2015年より現職。専門：表面界面科学。

キョウ ケンキ
邸 建輝



秋田県立大学システム科学技術学部 教授

1962年生まれ、1992年金沢大学自然科学研究科博士課程修了（博士（工学））、同年富山県立大学助手。1999年秋田県立大学助教授、准教授を経て2009年より教授、2012年～2018年同大学システム科学技術学部副学部長、大学院副研究科長。専門は、高分子および複合材料の塑性加工・接合、機能性ナノ複合材料、バイオマス生分解性複合材料。

セツ ショウトウ
薛 松濤



東北工業大学工学部建築学科 教授

東北工業大学教授・工学研究科建築学専攻長・災害技術国際センター長
1963年中国上海生まれ。1985年中国同済大学卒業。1991年日本東北大学博士修了後、東北大学助手、助教授、同済大学教授、近畿大学準教授を経て、2010年現職。専門は建築構造工学、建築耐震工学。日本建築学会及び日本地震工学会。

チョウ エンゴウ
趙 衍剛



神奈川大学工学部 教授

1963年生まれ、中国山東省出身。1996年に名古屋工業大学工学研究科博士後期課程修了後、同大学助手、准教授を経て、2009年より現職。専門は構造工学。

チン ヒュウ
陳 飛勇



(株)建設技術研究所上席参事、国際部技師長

1963年生まれ。1984年中国清華大学水利工学部を卒業、1987年武漢大学河川工学科修士課程を修了。同年、中国水利部長江科学院水理学研究所入所、1993年退所。1996年東京工業大学理工学研究科博士後期課程を修了後、株式会社建設技術研究所技師、主任技師、主幹技師、副参事、参事を経て、2015年より現職。専門は河川工学、生態工学。

賛助会員

(2018年8月入会)

日立化成株式会社
株式会社クボタ
東海旅客鉄道株式会社
武蔵エンジニアリング株式会社

(2018年11月入会)

東北電力株式会社

終身会員

中島 尚正 (2019年2月付)
高 偉俊 (2019年2月付)
岸浪 建史 (2019年3月付)

INFORMATION

平井 英史 会員
2018年12月25日逝去 92歳
公益社団法人日本化学会副会長

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

1951年 3月 東京大学第一工学部応用化学科卒業
1951年 4月 旭化成工業(株)入社
1962年 3月 東京大学工学博士
1972年 3月 東京大学工学部教授
1987年 3月 同大学名誉教授
1985年 2月 公益社団法人日本化学会副会長

山根 孟 会員
2019年 1月 7日逝去 90歳
東京電力株式会社顧問

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

1950年 3月 東京大学第二工学部土木工学科卒業
1950年 5月 建設省入省
1977年 8月 建設省中国地方建設局長
1978年 6月 建設省道路局長
1986年 7月 本州四国連絡橋公団総裁
1988年11月 東京電力(株)顧問

村瀬 平八 会員
2019年 1月15日逝去 84歳
日本学術会議材料工学委員会委員

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

1963年 3月 信州大学文理学部化学科卒業
1963年 4月 (株)富士塗料入社
1975年 8月 関西ペイント(株)入社
1986年 4月 同社技術研究所部長
1994年 4月 山形大学客員教授
1994年10月 日本学術会議材料工学委員会委員

柳ヶ瀬 勉 会員
2019年 8月 逝去 96歳
九州大学名誉教授

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

1944年 9月 九州帝国大学工学部冶金学科卒業
1949年 5月 九州大学助教授
1961年 3月 九州大学工学博士
1961年10月 九州大学工学部教授
1979年 4月 九州大学大学院総合理工学研究科教授
1985年 4月 九州大学名誉教授

山田 敏之 会員
2019年 2月22日逝去 80歳
公益社団法人日本工学アカデミー専務理事

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

1961年 3月 東京大学工学部応用物理学科卒業
1961年 4月 ソニー(株)入社
1963年 8月 米国イリノイ大学へ留学
1992年 6月 取締役役に就任
1993年 8月 中央研究所長に就任
2008年 5月 公益社団法人日本工学アカデミー専務理事

公益社団法人日本工学アカデミー
第7回〈通算23回〉定時社員総会及びEAJフォーラム開催のご案内

公益社団法人日本工学アカデミー

会員各位

本会第7回〈通算23回〉定時社員総会を下記の通り開催する予定です。総会後には、EAJフォーラム及び交流会を計画しております。

記

◇日時：2019年6月4日(水)13:00～14:15

◇場所：ホテル東京ガーデンパレス(東京都文京区湯島1-7-5)

◇議題(案)： 1) 2018年度事業報告及び収支決算の承認
2) 2019年度事業計画及び収支予算の報告
3) 役員の選任等

◇第2回EAJフォーラム「これからの工学が果たすべき役割を考える」14:30～17:30

◇交流会 17:30～18:30

編集後記

3月9日に、小林信一 会員をリーダーとする、政策立案のための科学プロジェクト第1回公開研究会(第187回談話サロン)に参加しました。これは、人間の知性で扱う範囲を超えて多様化、複雑化する社会にあって、政策提言、経営判断などに関して、科学的、政策的、社会的にも受容性の高い“エビデンスに基づく創造的方法論”の在り方、実現の方策について、産学官民で考察することを目的とするものです。

研究会では、(1)プロジェクトの説明、(2)NISTEP、京都大学、JSTへの訪問調査、会員アンケート、の結果報告、(3)ビッグデータ、AIの意思決定応用への期待や限界、エビデンスの在り方、などに関して、活用側、政策研究者、AI研究者、知識提供側の会員など参加者全員からの多様な意見の発表、があり、(4)活発な全体討論がなされました。

エビデンスのバイアス、AIの現状と期待、民主主義、政治・価値観との関係、選択肢と根拠、行政側のリテラシー、誰がどう使うのか、合意形成は、など、EAJならではの核心に迫る議論が多く、非常に有意義な研究会でした。企業経営にも有効と考えられ、今後さらに多くの会員のご参加が期待されます。

EAJでは次の30周年に向けて活動が活性化されており、林広報委員長のもとで刷新されつつあるEAJのホームページには新着情報が満載です。是非ご活用頂けると幸いです。

(企画推進グループリーダー・編集委員 城石芳博)